The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鳳山区紅毛港新廟群調査
Author(s)	前川, 正名
Citation	中国研究集刊. 2015, 61, p. 20-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 夜号（総61号）平成27年12月　20－37頁

鳳山区紅毛港新廟群調査

前 川 正 名

１．はじめに（紅毛港小史）

台湾南部の大都市、高雄市の南部に草衙という地下鉄の駅がある。この駅から20分ほど歩くと鳳山区紅毛港という場所にたどりつく。ここは現在、新興住宅地として開発が進んでいる。

海に面していないにもかかわらず、港の字が付されるその理由は、元々、紅毛港は高雄港に面した漁師町であり、小港区紅毛港に位置していたからである。高雄市小港区の紅毛港（鳳山区移転前）は、紅毛の名が示すとおり、かつてはオランダとの交易の拠点であったという。その後、ボラを捕る漁師が冬期の住居として利用するようになり、漁師達の仮住居として発達していく。漁師故に信心深い土地柄となり、廟が多数造られていた地域である。

戦後、漁業や海老の養殖等で栄えたが、海老の伝染病による養殖業への打撃等で、経済的苦境に立たされる。公害問題もかさなり、2007年の中央政府の政策によって、紅毛港住人の大半が、小港区から鳳山区に移住することとなった。住人の移住とともに各々の廟も移転・新築することになる(注１)。本稿は、これらの廟群を調査（2013年12月～2015年９月）したものである。なお、本稿ではこれらの廟群を便宜上、「鳳山区紅毛港新廟群」と仮に名付ける。

２．鳳山区紅毛港新廟群の調査

それでは実際に「鳳山区紅毛港新廟群」を見ていきたい。そもそも、この調査は筆者の個人的かつ偶発的な理由により、保安堂より始まっている(注２)。幾度も出入りしているうちに保安堂の管理をしている有志の世話人グループと顔

なじみとなり、鳳山区紅毛港全域の調査の際は、保安堂を拠点として調査活動を行なった。そのため、保安堂を中心に同心円状に調査区画を広めていく手法をとったのだが、初期の調査を終えてみると、偶然にも保安堂は、新廟群のほぼ中央に位置していた。主要な廟の所在を確認した後は、徒歩ないしは自転車によって地区内のすべての路地を通過し、簡易調査の際に見落とした小規模な廟の有無の確認を可能な限り行なった。どのような細い路地であれ、最低でも３回以上は通過している。しかし、「私人壇」(後述）に関しては、その性質上、本稿公開以後も増減を繰り返す可能性が高く、本調査がただの目安程度となる可能性が極めて高い。本稿は、その調査結果の報告である。なお、調査結果の記録はおおむね以下の通りに記す。

廟の名前、祀られている神々の名称、廟の特徴、そして参考として廟間の徒歩による移動時間を記す(注3)。なお、鳳山区紅毛港地区は、廟の集中している地域を中心に、大きく６地域に分けられる。そのため、これを仮に、A「朝天宮附近」、B「私人壇林立」、C「保安堂附近」、D「飛鳳宮附近」、E「朝鳳寺・飛鳳寺附近」、F「川越え」と名付け、各地域毎に分けて記す。(図１参照)

神（神明）の名称は、各廟内で用いられている表記を採用する。そのため、道教研究上で用いられる一般的な表記と異なる場合(注4)や、同一神でありながが

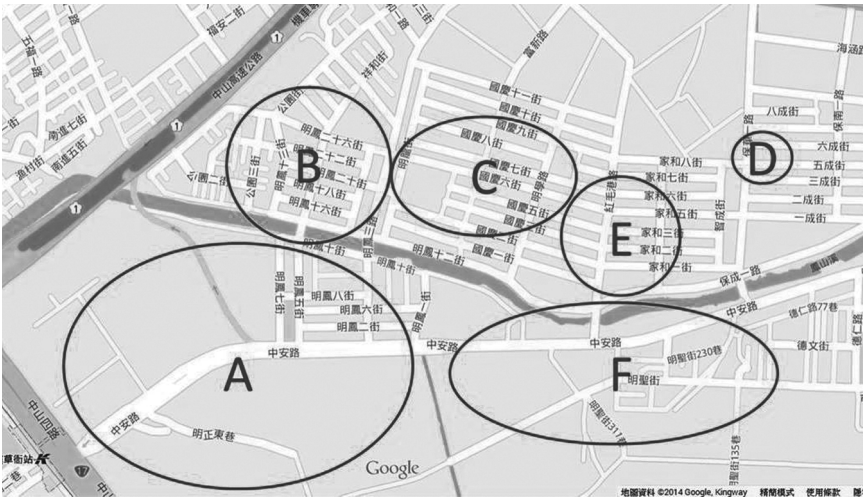

図１　鳳山区紅毛港新廟群全域図（Google マップをベースに筆者作成）

ら廟毎に異なる表記となっている場合(注5)もある。また、主神とは、廟の主神（主祀神）。主要副神（主要な陪祀神）とは、主神と同一の神卓（祭壇）、あるいは同列の神卓に置かれている神を指す。副神（陪祀神）とは、主神と主要副神以外の神、つまり主神と同じ場所に祀られていない神、または廟敷地内の小祠の類を指す。なお、主神・主要副神と同一地点に祀られていても、像の大きさが違い、かつ属神像とも考えられない場合（場所の都合で置かれているような場合）は副神としている。

また、廟の名称後ろの丸括弧内の大中小仮は廟の規模の目安である。ただし、「鳳山区紅毛港新廟群」は、新造された廟を主とし、民間祀廟ということもあり、「北座南面」しているとは限らず、また、建築様式も伝統的なスタイル（霊官殿、玉皇殿、三清殿の構成、あるいは四合院形式）をとらず、規模の大小にかかわらず一棟の建造物にしていることが多い。したがって、あくまで「鳳山区紅毛港新廟群内での大中小」であり、劉枝万氏の区分に従えば、中廟程度の規模のものを本稿内では大としていることもある(注6)。

なお、「私人壇」とは、現地の人々が使用している言葉で、日本語に訳すならば「個人が運営・管理している祭壇／廟」程度の意味である。本地域における典型的な私人壇とは、部屋の天井付近に板を日本の神道の神棚状に取り付けて神像を置いていたり、居住している部屋の片隅に小さな祭壇（日本の仏壇のようなもの）がある程度のものではなく、もう少し規模が大きい。すなわち、礼拝所として一定以上の空間を有している（部分的に廟化している）場所の中で、規模の大小を問わず外部の参拝者を想定していない場所をいう。

具体的な特徴として「一般家屋の軒先に扁額や提灯がある」、「大型の香炉や、祭壇前に常設の供物台がある」、「礼拝空間が一部屋ないしは家全体を占有し、居住空間とは隔離されている」、「しかしながら、家族あるいは親族以外（外部の人間）の参拝を想定していない」等が挙げられる。

廟の発展パターンの一つとして、部屋の片隅に作られている祭壇が、一部屋を占有する祭壇（祭礼専用の空間）となり、一棟の建築物へと変化し、建築物の増築・敷地が徐々に大きくなり、やがてはその廟（この頃には廟と称してよいと思われる）を管理する有力一族を核とする地域の廟へと成長していく、というものがある。

ただし、紅毛港の廟は、大規模な廟であっても、有力氏族の家族廟（宗廟）

としての側面が強く残っており、「外部の参拝者も歓迎する巨大な私人壇である」と判断することも、あるいは可能になってくる。

そのため、本稿では、外部の参拝者に公開しているかどうかを一つの判断基準とし、比較的小規模かつ外部の参拝を想定していないものを「私人壇」と表現している(注7)。

２．１　Ａ「朝天宮附近」

本地域は、地下鉄草衙駅から朝天宮附近の廟を対象とする。明鳳街以西・鳳山溪以南、すなわち朝天宮より天龍宮に向う際に渡る小さな川より手前をＡ地域とし、川向こう（鳳山溪以北）をＢ地域とする。なお、Ａ地域は、鳳山区ではなく前鎮区である。（図２参照）

聖天宮（小）

主　　神：南海観世音菩薩

草衙駅から１分。外からはそれなりの大きさに見えるのだが、入口１つの小型の廟である。紅毛港住人の鳳山区移転前から存在している廟と思われるが、民家と一体化した状態で私人壇に近い。

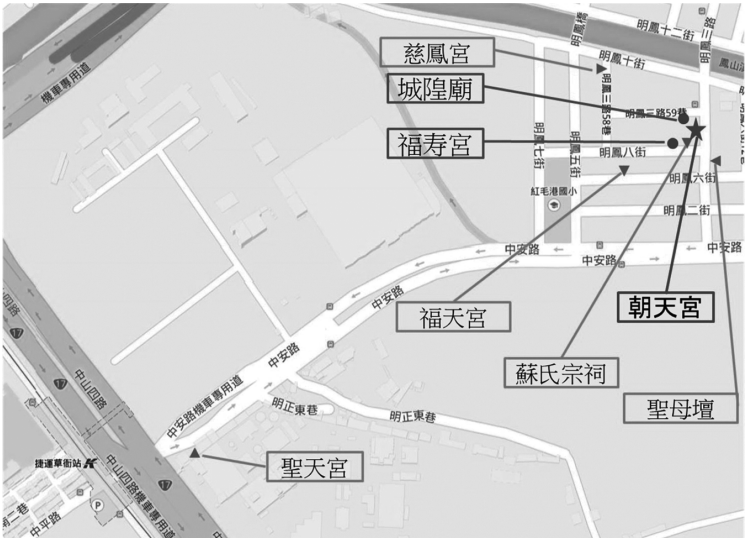

図２　Ａ「朝天宮附近」（Google マップをベースに筆者作成）

朝天宮（大）

主　　神：天上聖母

主要副神：註生娘娘、福徳正神

副　　神：太歳甲午年章詞星君（神位、太歳殿、2014年）[注8]、蘇氏宗祠（小、入口は別だが、朝天宮の敷地内）

草衙駅から20分。六大廟宇（蘇氏の宗廟）の一つ[注9]。入口は正面に５つ、両脇の楼閣にさらに２つ、計７つの大型廟。祭壇に祀られている神は３柱と少ないが、天上聖母の祭壇前方には、１ｍ級の「千里眼」と「順風耳」の属神像があるなど、威風堂々たる状態である。太歳殿には、祭事の際に人が装着する「千里眼」と「順風耳」の大型人形が置かれている[注10]。

福寿宮（小）

主　　神：福徳正神

朝天宮から１分。入口１つの小型の廟だが、建築様式は完全に廟であり、金炉も小振りながら見事な装飾が施されている。

城隍廟（中）

主　　神：城隍爺

副　　神：済公（祭壇前神卓）、虎爺（祭壇前神卓の下）、黒令旗（一階入口近くの外壁）

朝天宮から１分。入口３つ（二階）の中型の廟。二階に正式な祭壇を作るようだが、現在工事中であり[注11]、一階（入口１つ）に祀られている。また、一階には祭事の際に人が装着する大型人形（文判官、武判官、謝将軍、范将軍、牛頭将軍、馬面将軍）が並んでいる。

慈鳳宮（小）

主　　神：不明

城隍廟から１分。一般家屋の一階を改装したもので、内部の装飾は見事だが、規模も小さく私人壇と思われる。

聖母壇（小）

主　　神：不明

朝天宮から30秒。天上聖母を祀っていると思われるが、詳細不明。私人壇と考えられる。2014年４月に記録。ただし、2015年９月時の調査では、区画整理のためか、建物ごと消失。

福天宮（小）

主　　神：不明

一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

２．２　Ｂ「私人壇林立」

朝天宮より小さな橋を渡り、朝天宮を背にして左手（明鳳街以西・鳳山溪以北）をＢ地域とする（右手には天龍宮、済天宮が見える）。Ｂ地域は、ごく普通の住宅地であり、一階（家人の玄関を兼ねている）を改装しただけの私人壇が点在し、部外者の参拝を想定していない所がほとんどである。各廟間の距離は、５～10分程度である。なお、Ｂ地域は、前鎮区と鳳山区が入り組んでいる場所である。（図３参照）

明成堂（小）

主　　神：不明

朝天宮から至近の廟で、５分程度の位置にある。一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。玄関前提灯より観音佛祖、天上聖母、中壇元帥、虎爺将軍を祀っていると思われる。

図３　Ｂ「私人壇林立」

三聖堂（小）

主　　神：北極真武大上帝

副　　神：関聖帝君、孚佑帝君、天上聖母、城隍爺尊神、福徳正神、中壇元帥、虎爺将軍

一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

明鳳宮（小）

主　　神：天上聖母

一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

無極瑶池指霊宮（小）

主　　神：不明

一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

（仮名）洪仙姑（小）

主　　神：不明

一般家屋の一階を改装したと思われ、規模も小さく私人壇と思われる。軒先の提灯に右から「(恭祝)（洪）（仙）（姑）（聖）（誕）（千秋)」とある。扁額がないため廟名不明。主神と思われる洪仙姑の名を仮に廟名とする。

龍山府（小）

主　　神：白府千歳

一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。2014年の調査では確認できず。2015年時に発見したため、新設の可能性がある。

慈航宮（小）

主　　神：慈航大士

主要副神：無極皇嬢、玉皇四殿下、北極玄天上帝（祭壇手前）

副　　神：先天太上道祖、九天玄女娘娘、善財龍女

一般家屋の一階を改装したと思われ、規模も小さく私人壇と思われる。

２．３　Ｃ「保安堂附近」

天龍宮、済天宮附近より（明鳳街以東・鳳山溪以北）保安堂周辺をＣ地域とする。大中小、新旧様々な廟が林立する地域である。なお、Ｃ地域は全て鳳山区内である。（図４参照）

図４　C「保安堂附近」（Google マップをベースに筆者作成）

天龍宮（中）

主　　神：何府千歳

主要副神：註生娘娘、福徳正神

副　　神：中壇元帥（祭壇前神卓）、五営神将（祭壇前神卓）、虎爺（祭壇前神卓の下）、何賜王（何府千歳の属神）

朝天宮から５分。六大廟宇（呉氏の宗廟）の一つ。入口５つ（二階、中央両脇の入口はやや小さめ）の中型の廟。隣接の済天宮と比べるとやや小さいが、壁画等の装飾が凝っている。廟の裏通りから見える立体的な龍の壁画が自慢とのことである。

済天宮（中）

主　　神：張府尊王

主要副神：楊府元帥、大聖先師、註生娘娘、福徳正神

副　　神：中壇元帥（祭壇前神卓）、李氏宗祠（隴西堂）、甲午年章詞星君（神位、太歳殿、2014年）(注12)、五営神将、文昌帝君

天龍宮から１分。六大廟宇（李氏の宗廟）の一つ。入口５つ、両脇の楼閣にさらに２つ、計７つの大型廟。入口手前部分の龍とお金の模様が特徴

的で、階段の段数が少ない等やや独特である。

紫雲宮（小）

主　　神：不明

　済天宮から２分。一般家屋の一部を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

福安宮（小）

主　　神：福徳正神

　済天宮から４分。一般家屋の一部を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

保安堂（中）

主　　神：郭府千歳、海府大元帥、宗府元帥

主要副神：地蔵王菩薩、福徳正神、三十八号神艦（38にっぽんぐんかん）

副　　神：虎爺将軍（祭壇下）、邢府千歳（福徳正神の後方、神位）

　済天宮から５分。入口３つの中型の廟。青い屋根と石灯篭が目印。旧日本海軍の兵士と日本の軍艦を祀っており、新しい観光地点として近年注目されている廟である(注13)。

海衆廟（中）

主　　神：海衆先師、海衆聖爺、海衆将軍

主要副神：福徳正神、註生娘娘

副　　神：五営神将（祭壇前神卓）

　済天宮から５分。入口３つ（二階）の中型の廟で、海難者を祀る。旧紅毛港の時代には、30あまりの祠を管理していたという。保安堂も独立前はここの管理下だったようである。

代徳宮（大）

主　　神：池府千歳（前殿）、順天聖母（後殿）

主要副神：福徳正神（前殿）、註生娘娘（前殿）、三皇聖帝（天皇、地皇、人皇、後殿）、三奶夫人（陳靖古（順天聖母）・林九娘・李三娘(注14)、後殿）

副　　神：天上聖母、九天玄女、霊宝天尊、范府千歳、李府千歳、朱府千歳、呉府千歳、太白金星、中壇元帥、宋江公、普渡公（祭りの時のみ）

保安堂から５分。入口５つ、前殿・後殿を備えた大型の廟で、紅毛港住人の鳳山区移転前から存在している廟である。基本的には王爺信仰の廟といってよいのだが、古い廟のため祀られている神様の数も多い。先に挙げた神々のほか虎爺（前殿祭壇下、三教堂祭壇下）、千里眼や順風耳等、属神の像まで数えていくならば副神の類はさらに増える。

三子壇（小）

主　　神：不明

代徳宮から30秒。一般家屋の一部を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。

碧雲寺（小）

主　　神：観音佛祖

副　　神：南海観音佛祖、済公禅師、三奶夫人（林奶）、中壇元帥、康府千歳

保安堂から５分。一般家屋の一階を改装したもので、規模も小さく私人壇と思われる。ただし、一般にも開放している。

天師殿（小）

主　　神：徐甲真人

副　　神：碧霞元君、中壇元帥、福徳正神、観世音菩薩、北極玄天上帝、五営将軍、虎爺将軍

保安堂から７分。旧紅毛港にあった「主慈玄宮」（主神：三姑娘、碧霞元君。副神：観世音佛祖、北極玄天上帝、中壇元帥、虎爺将軍、五営官軍）を、移転を機に改名したもの。一般家屋の一階を改装したもので、規模は小さいが、一般にも開放しており、常駐の「爬刀梯」を修めた法師（道士の可能性もあり）が各種祈祷を行なっている。

２．４　Ｄ「飛鳳宮附近」

代徳宮入口前の道を（紅毛港路でＥ「朝鳳寺・飛鳳寺附近」方向へ曲がらず）、国慶九街・家和八街・五成街と、東へ直進した地点にあり、飛鳳宮を中心にいくつかの廟が集中して建っている。なお、Ｄ地域は全て鳳山区である。（図５参照）

図５　D「飛鳳宮附近」（Google マップをベースに筆者作成）

飛鳳宮（大）

主　　神：保儀尊王

主要副神：李府千歳、申国夫人、註生娘娘、福徳正神

副　　神：五営元帥、虎爺（公虎・母虎、祭壇下二箇所）、中壇先師（二階）、城隍爺（外遊中）、池府千歳（外遊中）、玉皇上帝（祭りの時のみ）、上元天官（祭りの時のみ）

代徳宮から10分弱。六大廟宇（楊氏の宗廟）の一つ。入口５つ、両脇に楼閣を持つ大型の廟で、広場に南霽雲将軍、賈賁将軍の石像がある。特徴的なデザインの金炉がある。

天師府（仮）

主　　神：張天師

飛鳳宮から１分。飛鳳宮に隣接する廟。仮宮のため未解放。主神の他、主要副神が２体いるが詳細は確認できず。

修善堂（中）

主　　神：観音仏祖

主要副神：清水祖師、五公菩薩

副　　神：五営将軍

飛鳳宮から１分。入口３つ（二階）の中型の廟で、飛鳳宮に隣接する。

楊氏宗祠（小）

主　　神：不明

修善堂に隣接（10秒）。私人壇につき未解放。

２．５　Ｅ「朝鳳寺・飛鳳寺附近」

朝鳳寺・飛鳳寺（紅毛港路を挟み、斜向かいに向い合う）を中心とする地域である。鳳山区紅毛港新廟群の中では、この二宇が最も大きい。なお、Ｅ地域は全て鳳山区内である。（図６参照）

正軍堂（小）

主　　神：水吉成公（３体）

飛鳳宮から５分。入口１つの小型の廟で、朝鳳寺に隣接している。ここの主神は旧日本海軍の兵士３名である。

朝鳳寺（大）

主　　神：観音仏祖

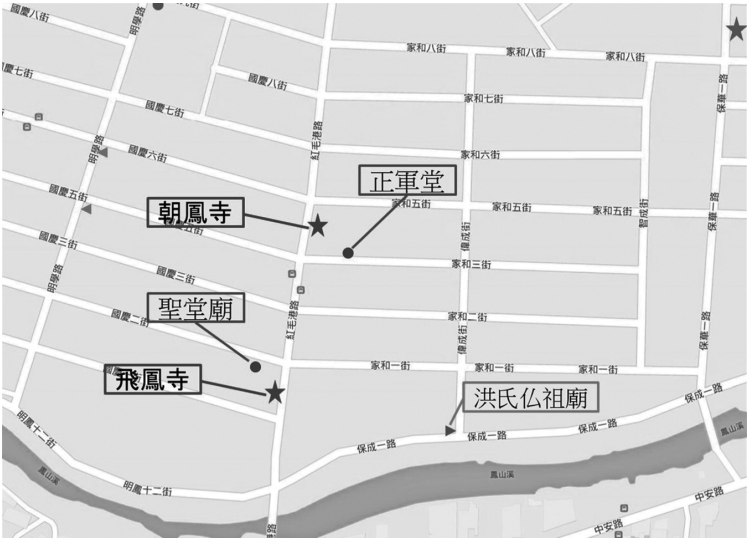

図６　Ｅ「朝鳳寺・飛鳳寺附近」（Google マップをベースに筆者作成）

主要副神：天上聖母、温府千歳、註生娘娘、福徳正神

副　　神：中壇元帥、十八羅漢、千手観音、虎爺（祭壇下）、太歳（太歳星君像の前に「太歳甲午年張詞」の神位を置く、太歳殿、2014）(注15)

飛鳳宮から５分。六大廟宇（洪氏の宗廟）の一つ。二階に入口５つ、両脇の楼閣にさらに２つ、計７つの大型廟。主神、主要副神、いずれも２体（計10体）の属神像を具えており、壮麗。塀の外側には、小港区時代の紅毛港住人の生活を描いた壁画を飾る（内面は一般的な廟の壁画）。

洪氏仏祖廟（小）

主　　神：不明

朝鳳寺から２分。私人壇につき未解放。

飛鳳寺（大）

主　　神：広沢尊王

主要副神：観音仏祖（南海仏祖）、朱府千歳、註生娘娘、福徳正神

副　　神：妙応仙妃（向かって右の別室）、管府千歳（十三太保殿）、謝府元帥、張上天師、池府千歳、中壇元帥、虎爺（祭壇下）

朝鳳寺から１分。六大廟宇（広東出身者の廟）の一つ。二階に入口５つ、両袖に楼閣を持ち、廟内にエレベーターまで備えた大型の廟である。祭壇に向って右の別室には広沢尊王と妙応仙妃の像が祀られており、祭壇の後ろの空間に、中華式の寝室や化粧台等が奉納されている。

聖堂廟（小）

主　　神：不明

飛鳳寺に隣接（１分）。入口１つの小さな廟。祭壇に小さな神像が２体置かれているが、配置の具合から、さらに一体あるのではないかと思われる。

２．６　Ｆ「川越え」

朝鳳寺から紅毛港橋を渡った地域（紅毛港路付近以東・鳳山溪以南）をＦ地域とする。ここは鳳山区紅毛港ではないため、紅毛港移転以前から建っている廟が存在する。ただし、集中して建っているわけではなく、安巡府、慈龍寺以外は、訪問するには自転車等の交通手段が必要である。なお、Ｆ地域は全て小港区内である。（図７参照）

先天宮（小）

主　　神：不明

朝鳳寺から５分。バス停（中厝里）のほぼ正面に位置する。一般建築に近い建物に３つの門があり、その門の上に代天巡狩、天上聖母と書かれている。同名の廟（五府千歳等を祭る王爺信仰の廟）より分香されたと思われるが、すでに閉鎖されているようで、詳細は不明。

安巡府（中）

主　　神：張府千歳

主要副神：福徳正神、註生娘娘

副　　神：五府王爺（張、李、莫、徐、朱、祭壇前方神卓）、中壇元帥（祭壇前方神卓）、五営将軍（祭壇前方やや脇）、虎爺（祭壇下）、太歳星君像（太歳殿祭壇・奥）、甲午太歳張詞星君（太歳殿祭壇の手前、右）・戊子太歳郢班星君（同、左）（2014年）(注16)、文昌帝君（文武殿）、武財神（文武殿）、外五営（廟を背に右の小祠）。

朝鳳寺から10分。入口３つ、両脇の楼閣に２つ、計５つの中型の廟。紅

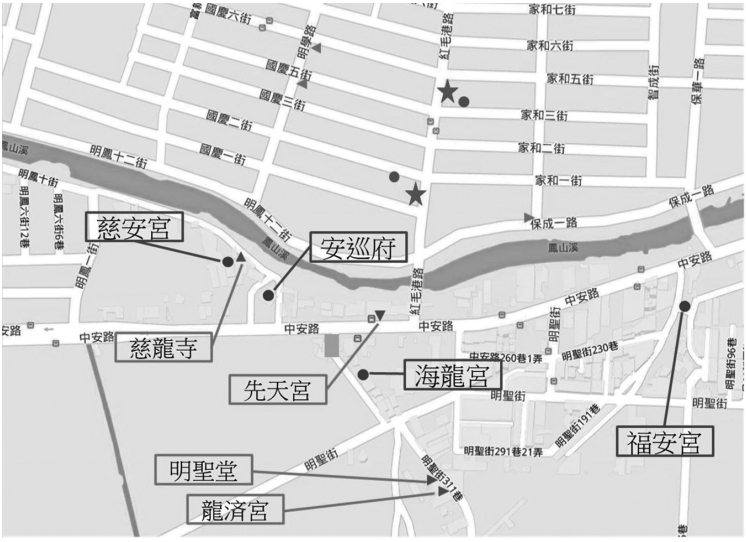

図７　Ｆ「川越え」（Google マップをベースに筆者作成）

毛港移転前から存在していると思われる。太歳殿には60体の六十甲子像が揃っている。

慈龍寺（中）

主　　神：董公真仙

主要副神：清水祖師、迦毘羅王、観音佛祖、張公法主

副　　神：玉皇上帝、三官大帝、水官大帝、福徳正神、註生娘娘、中壇元帥、五営将軍、虎爺

安巡府から１分。入口３つ（両側は小さめ）、その両脇の楼閣に２つ、計５つの中型の廟。紅毛港住人の移転前から存在していると思われる。両脇の門に擬人化された二十四節気の図が描かれている。

慈安宮（小）

主　　神：不明

安巡府から１分。慈龍寺に隣接している。一般家屋を改装した廟と思われ、すでに閉鎖されているか、私人壇であると考えられる。

明聖堂（小）

主　　神：不明

入口３つの小型の廟だが、建物は一般家屋に近い。祭壇に主神と考えられる１体（天上聖母か）と主要副神と考えられる２体の計３体の他、いくつか神像が確認できるが詳細は不明。距離的に徒歩での参拝（調査）は困難。

龍済宮（小）

主　　神：不明

一般家屋に宗教（仏教系）をイメージさせる屋根をつけた、いわば半廟とでも言うべき建築物の二階に祭壇が設けられている。建物全体を廟とみなすならば、中型の廟に相当。装飾のついた金炉、宗教色を帯びた小さな池等もあり、私人壇ではないと思われるが、詳細は不明。距離的に徒歩での参拝（調査）は困難。

海龍宮（小）

主　　神：何府千歳

副　　神：五年千歳（十二王爺：張、盧、侯、徐、呉、何、封、譚、趙、羅、薛、耿）、玉皇上帝、三官大帝、五文昌君（魁星夫子、文衡聖帝、朱衣天子、文昌聖君、孚佑帝君）等

世話人の住む家屋に隣接して仮宮に近い建物が建てられている。廟としては小規模。ただし、十二王爺を祀るのは、（この付近では）この海龍宮だけである。また、コの字型の祭壇に様々な神像があり、正面の祭壇だけで31体（属神像を除く）を祀る。極めて特徴的な廟である。距離的に徒歩での参拝（調査）は困難。

福安宮（小）

主　　神：福徳正神

主要副神：周将軍、註生娘娘

副　　神：観音佛祖、太子爺、五営旗、虎爺、馬将軍、太歳、中営、馬草、外五営（廟を背に左の小祠）。

増築の際、小型の廟（祠）を丸ごと覆う形で建てられている。敷地の関係であろうか、向かって右の壁面を利用して左に増築し、かつ祭壇は古いものをそのまま利用しているため、祭壇の位置が建物の中心より右にずれている。廟の発展過程の１パターンを見ることができる。距離的に徒歩での参拝（調査）は困難。

３．おわりに

前稿および本稿の「はじめに」にて述べたように、本地域の調査は、偶然の産物と言えるものである。興味本位で保安堂を参観し、その際、鳳山区紅毛港一帯が多くの廟を有していることに気が付いた。一通りの調査を終え、その結果を踏まえるならば、ここ十年以内に移設された廟がほとんどであり、法具や神像等、旧廟より受け継いでいる物も多々存在するものの、建築物に関しては歴史的遺産と呼べるものではなかった。

そのため、いわゆる伝統的な廟研究（フィールドワーク）として、無価値なものではないかとの疑念が涌き起こった。しかし、新旧紅毛港の歴史を紐解くならば、紆余曲折を経ながらも脈々と受け継がれている信仰心は確かに確認でき、その信仰心の具象化した存在として廟が設立・移設・維持されているのである(注17)。ならば、新造の廟にも一定の価値が見いだせるのでは無いだろうか。

また、本地域の寺廟は志工団と呼ばれるボランティアグループにより、日々のメンテナンスや各種活動（親睦会や宗教行事）が執り行われている。この志

工団は20～40代の若手が中心となっており(注18)、彼らの家族（子供を含む）もまた、その活動に参加している。この状況を踏まえるならば、今後、短くとも数十年から百年程度の活動の存続は予想できるだろう。ならば、移転してまだ間がない時期である現在の状況を記録しておくことに、おそらく学術的意味も将来的には生じていくのではないかと考えた(注19)。以上が、伝統的な廟の装飾はされているとは言え、コンクリート製に過ぎない新造の廟群の記録を公開する理由である。

注

(1) 小港区紅毛港は、六代廟宇（後述）の他、中小規模の廟が13あり、これらの中小規模の廟に関しては､鳳山区への移転が完了しているわけでは無い(移転計画があるにも関わらず仮宮すら無いものもある)。また、住人移転前から存在する廟もあるため、移転が完了するならば、総数では、（私人壇を除いても）30近い廟が同一地域に集中して存在する計算になる。

(2) 保安堂の調査については、前川正名「鳳山区紅毛港保安堂について」（『中国研究集刊』60号、2015年６月）参照。

(3) 公共自転車を借りる、バスと徒歩との併用、タクシーを使う等、他にも交通手段は存在する。

(4)「斉天大聖」と「大聖先師」（済天宮）等。

(5)「中壇元帥」（代徳宮）と「中壇先師」（飛鳳宮）等。

(6) 劉枝万氏は、「廟寺の成長」（『台湾の道教と民間信仰』風響社、1994年、128～132頁）において、廟の発展に関して、「無廟」「草寮」「小祠」「公厝」「小廟」「中廟」「大廟」の七段階に分けている。

(7) 廟名を記した扁額は、外部へその存在を主張するものであるが、存在は主張しても、部外者の参拝を想定していないという曖昧な状態にあることも、本稿で分類する「私人壇」の特徴と言えるのかもしれない。

(8) 2015年は、神位で「太歳乙未楊仙星君」。なお、神位の場合は、年と神明の名前を取り替える、或いは、名前を記した紙等を貼り替える形状になっていることが多い。

(9)「六大廟宇」とは、紅毛港を代表する六つの廟で、広東出身者の廟と紅毛

港の五大姓（楊、呉、李、洪、蘇）の宗廟からなる。（紅毛港内では）比較的歴史も古く大規模な廟が多い。

(10) 2015年９月時は本殿の属神像それぞれの脇に飾る。

(11) 2014年時には、コンクリートむき出しの状態であったが、2015年９月時には祭壇が完成し、内部装飾にとりかかっていた。

(12) 2015年は、「乙未年楊仙星君」。

(13) 詳細については前川正名「鳳山区紅毛港保安堂について」(『中国研究集刊』60号、2015年６月）参照。なお、前稿では、邢府千歳を副神より外していた。廟の紹介パンフレットによっては神明を記載しているものもあったが、神像が見当たらず、祀られた由来の分からない神でもあることから、名前を外した。しかし、前稿公開以後に神位を発見したため書き加える。なお、神位の台座に「檺林天皇殿」の文字が見える。

(14) 像の台座の表記は「陳乃夫人」、「林乃夫人」、「李乃夫人」である。なお、廟の案内板（神明一覧）では「三乃夫人」と表記。本稿では祭壇の表記を採用。

(15) 2015年は、「太歳乙未年楊賢」。ただし、紙を貼り替えて神位を使用しているため、「星君」の字が紙の下に隠れている可能性が高い。

(16) 2015年は、乙未太歳楊賢星君（右）、己丑太歳潘蓋星君（左、蓋の部分の文字は「亻」に「盍」)。

(17) 主神・副神に王爺信仰の神々が祀られている例が多く、先行研究群の「台湾（南部）といえば王爺」の見解を裏付ける調査といえる。

(18) 例えば、保安堂の志工団の代表は1975年生まれである。

(19) 私人壇から大型廟まで揃っており、廟の発展過程が同一エリアで観察できる。